

ふもんじきゅうけいだい

普門寺旧境内(本発掘調査B)

所在地 豊橋市雲谷町字ナベ山下7ほか
(北緯34度44分40秒 東経137度28分10秒)

調査理由 予防治山事業・小規模治山事業

調査期間 平成29年5月～平成30年1月

調査面積 300㎡

担当者 酒井俊彦・早野浩二



調査地点(1/2.5万「二川」)

調査の経過 発掘調査は予防治山事業・小規模治山事業に伴う事前調査として、愛知県農林水産部森林保全課東三河農林水産事務所から愛知県教育委員会を通じた委託を受けて実施した。普門寺旧境内は中世前期を主体とする山寺遺構で、愛知大学による分布調査、豊橋市教育委員会による測量調査・分布調査、発掘調査の結果、二つの旧本堂とそれに付随する多数の平場群、中世墓群、経塚、池等から構成されることが判明している。調査区は丘陵下位(現本堂の下位)の平場に設定した17A区(調査面積170㎡)、東向き尾根(現本堂の上位)に展開する平場群(豊橋市教育委員会によるF地区)中の下位の平場(F-1・F-2)に設定した17B区(調査面積130㎡)である。調査期間は17A区が平成29年5月から6月、17B区が平成29年11月から平成30年1月である。

立地と環境 普門寺旧境内は愛知県と静岡県との県境でもある弓張山地に形成された谷の奥部に立地する。普門寺旧境内の遺構が展開するのは現普門寺客殿裏の標高100mから260mの尾根上である。なお、17A区周囲の標高は約110m、17B区周囲の標高は約130mである。普門寺は船形山普門寺と称する高野山真言宗の寺院で、市内随一の豊かな歴史や文化財を誇り、近年は紅葉の名所としても親しまれている。

調査の概要 発掘調査の結果、調査前に確認されていた平場001SXに加え、さらに上位の丘陵斜面にも平場002SXを確認した。これらの平場とその周辺において、上位の平場と下位の平場を通行するために開削した通路と思われるような造作以外、明確な遺構は確認されなかった。平場や斜面の堆積層中には近世以降の遺物を包含するが、戦国時代の遺物も散見された。また、沢に面した斜面の堆積層中からは、渥美産山茶碗・甕・子持器台または仏供等、瓦に加えて、土師器皿がまとめて出土した。

17A区 上位の平場006SX(豊橋市教育委員会によるF地区のF-2)は長さ16.0m、最大幅6.5mで、チャートの岩塊を南端とする。平場006SXはその南端付近を発掘調査したのみで、明確な遺構は確認されなかったが、平場周辺や斜面の堆積層中からは、渥美産山茶碗・甕等、中世前期の遺物に加えて、古瀬戸後期の播鉢、土師器内耳鍋、青磁碗等、中世後期から戦国時代の遺物がまとめて出土した。

下位の平場007SX(豊橋市教育委員会によるF地区のF-1)は長さ15.0m、最大幅5.0mで、調査前から「墓」ともされる石積みが見えていた。墓の可能性のある石積み008SZは東向き緩斜面に設置され、上段は長軸1.50m・短軸1.30m、下段は一辺約2.30mの規模である。石積みは周囲に算出するチャートと砂岩を利用して方形の石列を構築し、石列内と背面の緩斜面には拳程度の礫が集積されていた。集積された礫群中からは、銭貨(寛永通宝)、鉄釘等が出土した。

沢に続く斜面009NRは堆積層中に中世前期を主体とする遺物を包含し、渥美産山茶碗・

甕・蓮弁文壺・刻文壺等が多く出土した。その他、沢付近から出土した特徴的な遺物として、唐草文をあしらった青銅製飾金具、石硯等がある。

ま と め 今回の発掘調査の結果、普門寺旧境内の遺構は現本堂上位の丘陵を主体として濃密に展開することが改めて明らかとなった。今後、出土遺物の詳細な分析を通じて、平場の時期、機能等、その利用実態が明らかになることが期待される。また、17B区の石積み008SZは、17世紀後半以降の普門寺の復興と山麓への境内移転に関連する可能性も考慮される。

(早野浩二)

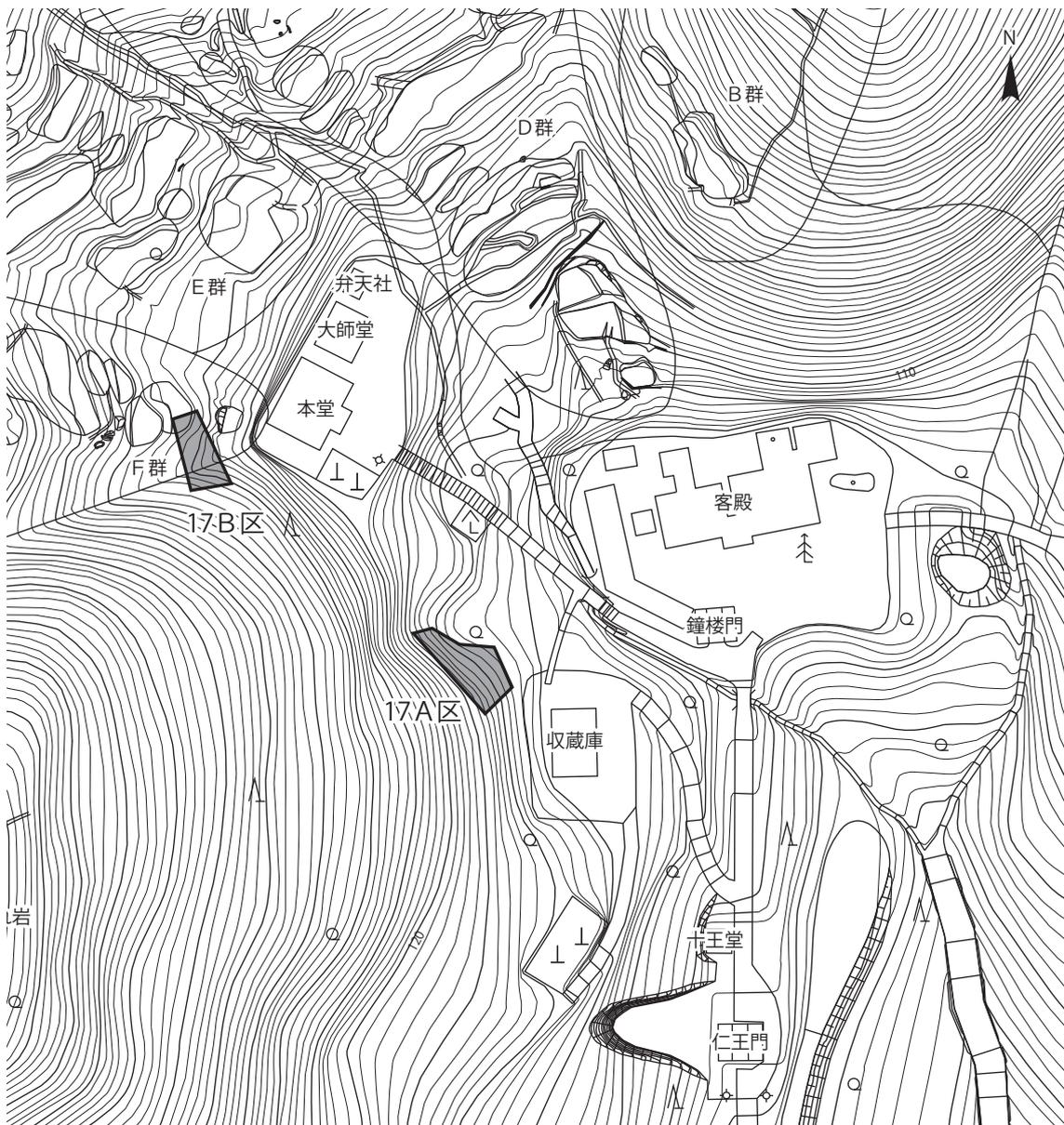


図1 調査区配置図 (S=1:5000)



普門寺旧境内遠景



17B区全景



17A 区全景



17 A 区の通路状遺構



17A 区 遺物出土状況 (山茶碗・土師器皿)



7 A 区遺物出土状況 (子持器台または仏供)



17B 区 平場 006SX 周辺遺物出土状況 (山茶碗等)



17B 区 沢 009NR 遺物出土状況 (石硯)



17B 区 石積み 008SZ 検出状況 (南東から)



17B 区 石積み 008SZ 全景 (東から)